

私立大学研究ブランディング事業

2020年度の進捗状況

学校法人番号	131023	学校法人名	実践女子学園			
大学名	実践女子大学					
事業名	源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成					
申請タイプ	タイプB	支援期間	2018	年度～	2020	年度
参画組織	文芸資料研究所、文学部、生活科学部					
事業概要	源氏物語研究の伝統を有する本学が国際的な拠点を形成し、文理融合による独自の学際的手法によって研究を実施する。本事業により源氏物語研究の新たな展開と、日本文化の理解促進という成果が得られる。グローバル化する社会で日本文化の更なる発信が課題とされる中、本事業の成果の活用によって源氏物語を源流とする日本文化の深い教養と発信力を備えた人材を輩出し、世界と地域に貢献する教育研究機関としての地位を確立する。					
①事業目的	源氏物語は、世界最古の女流文学・長編小説のひとつであり、日本の文学・文化・社会に大きな影響を与え続けている。海外でも多くの翻訳が流通する中で、国際的にも高い評価を受けており、近年の日本文化に対する関心の高まりの中、更なる注目を集めている。本事業は、源氏物語研究について創立以来の伝統と蓄積を有する本学において、国内外の研究機関・研究者との連携のもとで学際的・国際的な研究の実施と拠点形成を行い、その成果発信をもとに本学のブランディングを行うものである。					
②2020年度の実施目標及び実施計画	<p>【研究活動】</p> <p>前年度から引き続き研究活動を実施するとともに、成果の蓄積と連携体制の拡充をもとに国際的な研究拠点としての整備を進める。また、中間報告のシンポジウム開催等により当該時点での成果を取りまとめるとともに、全体の進捗確認および計画の調整を行う。</p> <p>【ブランディング戦略】</p> <p>研究活動の成果をもとにシンポジウム、イベント、生涯学習講座等によるブランディングを展開。また、東京オリンピック・パラリンピックと連動した本事業の紹介等を実施。</p>					
③2020年度の事業成果	<p>【研究活動】</p> <p>ブランディング事業推進体制の下、以下の事業を推進した。</p> <p>①超高精細マイクロスコープを用いた古典籍研究</p> <p>本学が所有する古典籍資料に加え、今年度新規に収集した源氏物語「幻」や「須磨」について、文献学的調査のみならず、本事業で推進してきた超高精細マイクロスコープを用いた料紙観察を実施。古典籍に含まれる繊維や填料を分析し、科学的な根拠に基づく年代推定手法の確立に取り組んだ。</p> <p>②平安期の女房装束の復元に向けた研究</p> <p>源氏物語に登場する「明石の君」の装束復元に向けて、研究会を実施。平安時代当時の形状・様式等について、多岐にわたる文献や鎌倉・室町期に奉納された御神宝なども参照しながら、復元に向けた制作を進めた。また、研究を進める中で、平安期の装束は現代の装束とは大きく異なることが判明したため、対比として現代の宮廷装束も制作し、比較検討を進めた。</p> <p>③本学所蔵の古典籍資料に関する研究</p> <p>古筆切を中心とした古典籍資料(文芸資料研究所所蔵等)の調査研究の継続。</p> <p>【ブランディング戦略】</p> <p>新型コロナウイルスの感染拡大により、学内外での活動が制限され、また、オリンピック・パラリンピックも延期になるなど、当初予定していたイベント等は中止もしくは変更せざるを得なかった。そのような状況下ではあったが、実施可能な広報活動やシンポジウム等を開催し、ブランディングの展開に努めた。</p> <p>①webサイトによる情報発信</p> <p>本事業の特設サイトをリニューアルし、積極的な情報発信を行った。平安期女房装束の復元過程を写真で紹介したり、昨年度実施したパリでのイベントについては写真だけでなく、動画を交えて成果を公開した。また、英語サイトも開設し、海外に向けた発信もおこなった。</p> <p>②オンラインでのシンポジウムの開催</p> <p>「紙のレンズから見た古典籍」と題したシンポジウムを開催。コロナ禍の中で、積極的な広報が行えなかったにもかかわらず、150名の参加申し込みがあり、かつオンライン開催としたことによって参加者も日本のみならず、ノルウェー、イギリス、オランダ、アメリカ、韓国、台湾と多岐にわたる地域からの参加があり、本事業の研究の世界的な関心の高さがうかがえた。なお、シンポジウムの内容は精選し、書籍として刊行する予定である。</p>					

<p>④2020年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(自己点検・評価) 今年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響が大きく、当初予定していたイベントや事業の実施ができず、ブランディング戦略の推進については難しい部分が多い1年となった。一方で、研究活動については、超高精細マイクロスコープによる古典籍研究や装束復元に向けた研究会をzoomで開催するなど、実施可能な形態を模索しつつ推進したことで、当初の想定を超えた形で研究成果を残すことができたといえる。 以上については、次年度以降も継続的に取り組み、成果について積極的に発信していく。</p> <p>(外部評価) 2020年度の研究成果については、2021年6月実施予定の外部評価・助言委員会にて評価を得る予定である。 委員会の評価結果を今後のブランディング戦略に反映していく。</p>
<p>⑤2020年度の補助金の使用状況</p>	<p>本事業に関わる経費として主に、研究に関わる実験・観察にかかる消耗品および古典籍資料の購入、装束の制作費用、広報費用として執行した。</p>